

V 共同利用研究

1. 概 要

昭和57年以来、研究課題として「計画研究」並びに「自由研究」を併置し、昭和62年度には「資料提供」を設置した。さらに平成6年度から「所外供給」を新たに設置し、これらに係る共同利用研究が実施されている。

「計画研究」とは、本研究所内推進者の企画に基づいて共同利用研究者を公募するもので、個々の「計画研究」は3～5年の期間内に終了し、まとめた成果を公表する。

「自由研究」とは「計画研究」に該当しないプロジェクトで、応募者の自由な着想と計画に基づき所内対応者の協力を得て、継続期間3年を目処に研究が実施されている。

「資料提供」とは、資料（体液、臓器、筋肉、毛皮、歯牙・骨格、排泄物等）のみを提供する共同利用研究として実施されている。

「所外供給」とは、本研究所以外の研究機関で行うことがより適切な研究のために、生体のサルを所外に供給するものである。

平成9年度の計画課題、応募並びに採択状況、研究会等の概略は以下のとおりである。

(1) 計画研究

(実施予定年度：課題推進者、下線は代表者)

1. 野生ニホンザルの現状把握に関する方法の開発と保護管理学の構築

平成7～9年度：渡邊邦夫・東 滋・鈴木 晃

野生ニホンザルの地域個体群とそれをめぐる環境条件を見直しながら、猿害のおこるメカニズムとその防御法の開発、影響を与えているであろう社会的要因の分析、鳥獣保護および狩猟等関連法案の検討など野生ニホンザルの保護管理に関する総合的な方法論の確立を目指す。

2. 類人猿の発達とその生物学的基礎

平成7～9年度：松沢哲郎・小嶋祥三・

友永雅己・濱田 稔・松林清明

霊長類の中でもとりわけヒトに近縁な類人猿を主な対象として発達とその生物学的基礎の研究を行う。ヒトや他の霊長類を対象とした比較研究でもよい。姿勢・運動、学習行動、コミュ

ニケーション、社会的な場面での行動などの研究と、発達の基盤となる形態学的・生理学的研究との関連を追求する。

3. 霊長類における視知覚および視覚認知の特性とその脳内機構の研究

平成7～9年度：三上章允・松沢哲郎・

中村克樹・桜井芳雄

霊長類における形態視、色彩視、立体視、運動視などの視知覚および視覚認知の機構を心理物理学的手法、神経生理学的手法、神経組織学的手法によって解明するとともに、霊長類における視知覚と視覚認知の特性をヒトとの比較において考察する。

4. 食性との関連からみた霊長類の歯牙形態の変異

平成7～9年度：高井正成・國松 豊・茂原信生

歯牙形態の比較による現生及び化石霊長類各群の系統分類を行う。また機能形態学的な立場から、歯牙あるいは顎骨の食性との関連を明らかにする。

5. 生体分子の構造解析による霊長類の系統・進化

平成7～9年度：竹中 修・景山 節・庄武孝義

核やミトコンドリアDNAの微小変化やダイナミックな変化、あるいは微量タンパク質の高感度分析やcDNA分析等、生体分子の構造変化を生化学的、遺伝学的手法により調べ、霊長類の系統・進化を明らかにする。

6. ニホンザルの採食生態と社会関係に関する比較研究

平成8～10年度：山極壽一・杉山幸丸・

森 明雄・大澤秀行・松村秀一

ニホンザルの生息環境の定量的把握を行った上で、各地のニホンザル野生群を中心に採食生態と集団間、集団内の社会関係を調査し、環境条件の相違によって行動特性、個体間や集団間関係に生ずる種内変異を分析するとともに、多様な環境に生息するニホンザルの可塑性に富む採食戦略、社会構造のモデルを再考する。

7. 霊長類の静的機能形態学

平成8～10年度：茂原信生・毛利俊雄

解剖を主たる手段として、各種霊長類のおもに軟部形態の特徴を記載し、その機能的意義を明らかにする。とくにロコモーション、表情、発声、循環器系、等に関する研究を重視する。発生・成長の途上にある標本の研究も含む。

8. 霊長類におけるストレス反応に関する研究

平成8～10年度：鈴木樹理・大蔵 聡・友永雅己
・中村 伸

霊長類におけるストレス反応について、多面的な研究を行う。物理的のみならず、霊長類に特有な心理的、社会的ストレスに対する生理学的変化や心理学的、行動学的変化の分析、定量を試みる。またストレス反応時の神経・内分泌・免疫系の相互のかかわり合いを解明する。

9. 霊長類の発生・発達・加齢に関する研究

平成9～11年度：林 基治・小嶋祥三・景山 節
・濱田 稯・中村克樹・清水慶子・大蔵 聡

霊長類の発生・発達・加齢にともなう遺伝子、細胞、器官、組織における変化を調べるとともに知覚、認知、学習、行動等個体レベルの変遷過程を明らかにし、霊長類の個体発達の特徴を考察する。

10. ヒヒとマカクの比較生物学

平成9～11年度：庄武孝義・川本 芳・平井啓久
・相見 満・松林清明

これまでの研究で霊長類の分類群間の遺伝距離は他生物群のそれに比べて著しく小さいことが指摘されている。ここでは、ヒヒとマカクに焦点をあて両者の遺伝学的、形態学的、生理学的等の特性を検索、比較し、上述した霊長類の特殊性が何に起因しているかを探る。

(2) 応募および採択状況

平成9年度のこれらの研究課題について、106件(175名)の応募があり、運営委員会共同利用研究専門部会(丸橋珠樹、和 秀雄、小嶋祥三、竹中 修)並びに共同利用研究実行委員会(濱田稯、三上章允、大蔵 聡、中村 伸、渡邊邦夫)との合同会議において採択原案を作成し、協議委員会(平成9年2月12日)の審議・決定を経て、運営委員会(平成9年2月28日)で了承された。

その結果、98件(166名)が採択された。各課題

についての応募・採択状況は下記のとおりである。

課 題	応 募	採 択
計画研究 1	4件 (8名)	3件 (7名)
2	3件 (3名)	3件 (3名)
3	3件 (9名)	3件 (9名)
4	0件 (0名)	0件 (0名)
5	8件 (14名)	8件 (14名)
6	5件 (6名)	4件 (5名)
7	9件 (14名)	7件 (10名)
8	6件 (11名)	6件 (11名)
9	9件 (12名)	6件 (9名)
10	3件 (6名)	3件 (6名)
自由研究	32件 (53名)	30件 (50名)
資料提供	17件 (27名)	21件 (33名)
所外供給	7件 (12名)	4件 (9名)

(3) 研究会

平成9年度は、以下のとおり7件の研究会が採択・実施された。

1. 「ニホンザルの現況」研究会

平成9年10月4日～5日

渡邊邦夫・東 滋・鈴木 晃・山極壽一・
川本 芳・後藤俊二

2. 霊長類の思春期発育とは何か？

平成10年1月22日～23日

片山一道・濱田 稯・鈴木樹理・大蔵 聡

3. 霊長類の食性と歯牙・顎骨の形態

平成10年2月6日～7日

高井正成・國松 豊・茂原信生

4. 分子レベルから見た霊長類の進化

平成10年2月13日～14日

竹中 修・庄武孝義・景山 節・川本 芳

5. 霊長類の巧みな手指運動を可能にする脳

平成10年3月19日～21日

中村克樹・小嶋祥三

6. 第27回ホミニゼーション研究会

「ヒトを人間たらしめるもの」

平成10年3月19日～21日

杉山幸丸・竹中 修・茂原信生・林 基治・
松沢哲郎・小嶋祥三

7. 霊長類の生体防御系と疾病・病態

平成10年3月28日

中村 伸・松林清明・後藤俊二・鈴木樹理